やさしいしはい

無我利道場を訪ずれるのはこれで2度目になる。無我利道場の名前だけは随分前から知っていたんだけど"また新しいた同体が出来たんだな"ぐらいに思っただけで、どんな人たちが、どんな考えで、どんなことをしているのか、まったく知らずにいた。だから、ちゃんとした意味で無我利のことを知ったのは、魚里人の創刊号を読んでからということになる。その時の感想や、無我利で考えたことなんかも混ぜ合わせて、おそらくは僕らに対するメッセージでもあったと思めれる、魚里人や分権独立運動情報に掲載された、ポンのビッピームーブメント総活に対する僕の反応、考えた罪など少しまとめてみようと思う。

【僕自身のこと】

これを書くにはまず、どうしたって僕自身の話から始めなければならない。今年23才になる僕は、北海道で生まれ、5才のときに炭杭の不況が原因で千葉県に引っ越してきた。 それから小学校ら年生のとき東京へ…。だから育ったのは東京ということになる。

中学のころ、いめゆるプロテストソングが花ざかりで、多くの人がそうであったように やはり僕も岡林信康を働いて感動したものだった。 をして自分でもギター 茎買いこんで、 横之たてのコードで曲を作ったりしていた。 をして髪をのばし風紀の先生や枝長によく呼 びだしをくらっていた。別のクラスのあばれん坊に厳かされたこともあったか、とうとう 長髪のまま卒業してしまった。

高校に入った僕は、ボブディランに狂い、 そしてウディかスり~という人のことを知った。アメリカ中の橋の下の寝ごこちを知るというウディの旅のうたを聞くた心に、"自分も旅に出てみたい"という感情が溢ふれてやまず、とうとう高校1年の夏休みに、僕はりュックいとつで家を出た。そして国道に立ち、北海道に向けて親指をのばした。不安と期待がごちゃまぜになった感じご、橋の下や駅の待ち合い室、親戚の家など泊まり歩きなから、旅は約3週 向続いた。この始めてのヒッチハイクは、多くのことを僕に教えてくれた。学校が休みになると必ずどこかに行っていた。

学校にかよっている時は、放課後毎日のようにエレキギターをかき鳴らし、バカごかい音に醉っていた。をしてそのバカごかい音にも飽きてきて、友人の影響もあってアメリカのウエストコーストの音楽や、カントリーミュージックを好んで働くようになった。数々のミニコミを通じて、カウンターカルチュアやビッピーの影響をうけ、"ステキだなぁ"と思いだしたのもこの項だった。

やはり同じ項、高被3年の時、ヤマハボイコット運動のことを知った。オームという雑誌に書いて取った文章から、ポンの名前と存在を知ったのだった。僕は、非常に共感を示したものの、その運動を、単にヤマハの向題としかとらえられず、南西諸島の南発という美名のもとに行われている計画とはいったい何なのか、と及きな眼で見、つきつめて考えることを忘れていた。

高校を辛業してからも同じで、社会向題などは、まったく線遠いものだった。三里塚など心情的には支持しながらも、やはり単なる傍観者でしかなかった。ネクタイとスーツをきらっていた僕は、日々アルバイトにあけくれていた。そして、とんでもないエリート意識を持っていた。自分は資本主義の最外辺を住きることにより、体制に協力していないという意識、それが反体制であるかのように思っていた。

そんな考えを持ちつづけなから、僕はほが、と村と出合い、その中にあるプラサード書店というところで働くようになった。その時の話はまたあとご書くけれど、本屋で働くようになってまもなく、"ポンが雑誌を作った"という話が伝めってきた。その時まで僕は、ポンが技年久斗争の渦中に身を投じていることを知らずにいた。

そんなふうにして、僕は魚里人を手にしたんだけれど、読んでみて感動というよりも、 大ハンマーで後頭部を殴られたような気かした。特に観念的平和論者という言葉がこびり ついて離れなかった。自分にとって久しくなかった感情が小きあかり"とにかく無利利に 行ってみよう"と決心しためだった。と同時に、僕は今までの自分の考えを批判してみる ようになり、世界で起こっているさまざまのことについて、考えたり見まれしたりするき っかけになったんだ。

[大好きな音楽のこと]

無里人を読み、無我利ごのは活を体験するうちに、僕は今まごの自分の生き方が体制に とって、まったく都合の良いものだったんじゃないか、と思うようになった。僕だけじゃ なく同じように考え、住きてきた人下ちもまた知らないうちに操作されていたのでは…? いや、操作されていたんだ。僕らは泳がされていた。体制側は革命の状況をしりがけるために、僕らの意識を巧みに操作していた。マスコミは実に、その意識を操作することが、 いちばんの仕事だるう。僕らだって充分にその対象者であったわけなんだ。

たとえば音楽、その中でも時に僕らの世代にとってひとつのあこかれ以上のものだった ロックンロールを利用し、いかに僕らを操作してきたか。彼らはロックンロールの持つか を確かに知っていた。激しいりごムの中にある黒人の社会的境遇ゆえの反抗と、僕らの若 さゆえの反抗の結合したエネルギーを知っていた。だからこそ彼らは、ロックンロールを 提供する側になり、コンサート会場を用意することによって、僕らのエネルギーを封じこ めようとしたんだ。

ちょっとミー h- 的になるけれど、日本でもグループサウンズなんていうの がマスコミ

の手によって作り出されたことを思い出してほしい。その頃はちょうど学生運動がさかんだったときだ。グループサウンズの出現は、その時代の若者が持っていた社会不満や、反抗のエネルギーを、学生運動にごはなく用意されたコンサート会場での熱狂と失神に、見事にそらしてしまったとは考えられないだるうか?その後の多くのロックンロールのスターたちも、その辺で利用されているような気がする。ロックンロールという自由の幻想を提供することによって革命をしりぞけ、そして自らは、商品化したロックンロールで稼いだんだ。

音楽の流行をみても、あれだけ若者の心をつかんだプロテストツングか今では全く歯かれずに、ラジオ、テレビから流れてくるのはニューミュージックに変わってきた。その向時代は高度経済成長期をむかえた。経済成長によってもたらされた商品の増加と、GNP増大の中で、無機質の空向での住活の向上を、さらにすばらしく色どるかのように、ニューミュージックの軽いりズムがひがきめたっている。成長の犠牲になった人々や、圏景の壊死といったことは、まったく想像がつかない。音楽の流行は時代と無関係ではないようだ。ロックンロールだけでなく、すべての音楽は彼らに握らせてはならない。音楽は大切なもの、必要不可欠のものと思う。その大切なものを彼ら資本にゆだぬるということは、またいとつ飲めくさりを増やすことになる。だからこそ僕らは音楽の持つものすごいエネルギーを、彼らに封じこまれることなく解きなっていかなくてはならない。彼らの与えてくれたもので僕らは自由になれっこないんだ。

「やせしいかくめいたついる」

さて、マスコミ自身による操作については、もうかなりの人が気付いてかっかからないように注意してきたと思う。だけどそのマスコミに対抗して現めれたミニコミの中にも落とし穴があ、たようだ。カウンターカルチュアから出てきた意識や眩き方も利用してきたようだし、これからもき、と利用していくことだろう。そしてこれは体制による直接操作よりもも、とたちの悪いものだと思う。

カウンターガルチュア、或いはヒッピームープメントの思想はミニコミによりかなり電伝されてきたと思う。最近になってマスコミはその事や文章、性き方を紹介し、新しい意識、自由な生き方、というふうに認めている傾向にある、認めることによって一定の社会的影響力を持たせようという中けだ。そして逆に広範囲の若着を操作していくんだ。何なたちが悪いがというと、つまり体制側が彼ら自身のロで"あみしなさい、こうすべきだ"と電伝するのではなく、操作対象者の中から浮か似でた少数者、例えば今までカウンターカルチュアのリーダーだったような人たちの口をもって電伝し、操作していくからなんだ。やさしいかくめいという本もその危険性がかなり高いようだ。まだオ1巻しが発行されていないが、巻頭にりアリティということについて4んの対談が載っている。読んだんも多いと思う。みんなどんな感想を持ったんだろう。僕になまるでリアリティが感じられず

むしる腹がたってきてしまった。

今現在も公宮や戦争ご多くの人々が苦しみ死んでいるし、不沈をもろにかぶった日産労働者は飢えに苦しみ、寒さで死んでしまう人もいることを僕は知っている。ところが、そういった現実をまるで無視して"死は死だ"とか"死 ぬ人は死ぬべくして死に、生きる人は生きるべくして生きている"とか云っている。また"原子爆弾にもいい悪い は本当は無いと思っている。 あれは在るトです"といったことまでも…。

日雇労働者の凍死や原爆を生み出しているこの社会から離脱し、自分の内面へ向かうことで社会的現実は無視出来ると思っている。社会、国家、権力を無視してしまえばそればもはや存在しなくなるという。このような考えを新しいものとしてみんな信じてしまうのだろうか…。

いった()僕らは公宮に命を削られていく人々の"もっと長生さしたい"という願いや、 仕事にあぶれた日屋労働者の"飢死しないために喰いものをよこせ!!"というまったく正



当な要求に対して耳をふさいでしまっていいものだろうか。ためし にそれらの人々の前にいって"死ぬ人は死ぬがく して死ぬ んですよ" とか"内面へ向かうことであなたの空腹は無視できるんですよ"なんて 云ってみるがいい。これらの現実を直視できないかくめいなど、ファレタジーとくかるいょうがない。

[本屋でのこと]

さてそのやさしいかくかいの差末に、ブックリストがのってるんだけど、それはプラサード書店というところでピックアップしたものだ。前にも書いたように、僕はこの本屋では 奪をしていた。をこら辺のことを少し書いてみよう と思う

このプラサード書店は、取り次ぎ会社をとうしての自動配本システムを否定し、自分たちで本を選び、仕入れも自分たちでやる、という本屋だ、た。僕はその姿勢が好きだった。でも同時に又あたりまえのことだとも思った。だけどマスユミはやはり、新しいタイプの本屋として宣伝した、今のなんごも売れる本を乞ろえればいいんだ、という本屋の本り方の批判をぬきにして、本来あたり前ごあるべきことの新しさを強調した。まぁマスユミなんてそんなものなんだろうけど。

それごこの本屋での本の売れ方なんだけど、いめゆる精神世界の本がよく売れた。アメリガのヒッピーたちに読みつかれた本は、1少ずと云っていいほど売れていた。中でもバグワン・シュリ・ラジニーシという人の「存在の詩」「完極の放」といった本の売れ方は、ま

さに驚異的だった。僕はこの本をちらっとしか見ていないので評価のしようがないけれど ただこれだけがストセラーになり、彼の洋書やカセットテープなどまとめてちる、いろと 買い込む人が何人もいたということは、ちょっと異常のような気がした。

それに比べて、三里塚や原子力発電所など今の社会不正に敢然とたちむかう 斗うん々の本は、ポツリ、ポツリだった。これは本の性質ということを頭にいれても、その差は承まりにはげしすぎた。これは今の函潮を象徴しているように思える。

社会不正を見ようともせずに、逃避していくことを進める思想が僕らの向にまんえんしていた。そういった思想の伝導者の売り上げに、これ以上協力することは心者しくとても出来なかったし、ちょうど農場建設といった魅力的な仕事もあったので、本屋をやめることにした。

[逃避思想と世の中のうごき]

社会的現実を逃かれる思想は流行した。僕らのエネルギーをそらす勢力は増大した。体制側へ多くの人々がドロップインし、みるみる反動化してしまった。"ボクは政治にはぜんぜん興味がないんごす"なんて彼らが手をたたいてよるこがそうな言葉を、ちかごろ多く耳にするようになってきた。

南無妙法蓮華経と、た鼓を叩いて平あを祈る人々は"あししょうさまの云うことだから"と自らの囚人性をさらけだした。自分らを受けいれてくれるところなら、権威を認めその下に仏ざまづくのか。権力にへつらい人民をうらぎってしまうのか。中国侵略、満州国建立のために、侵略的移民の先発隊として多くの信者が大陸に渡った歴史を、今もまたくりかとしたいのだろうか。

反権が、反権威などかウンターガルチュアの持っていた意味は、もほや牙を抜かれ、まったく見当ちがいのものとなり今に至っている。もうカウンターではなくなってしまったんだ。

それでもまだ社会的現実から逃がれ、逃げ腰を正当化する思想を高々と掲げ、新しい意識、生き方と自負している人々に働きたい。 どこが新しいのカワ と。

例えば大王時代の文壇で流行したという思想は、およそこんなものだった。自己完成のためには自己を抑圧する周囲から逃がれ、静かな内省と観照につとめることだ。これな今の僕らの向に広かる思想とどこか似てはいないだろうか?

その項の社会状勢を考えてみると革命イデオロギーがふきあれていたころだ。そういった時に人民の意識をそらすために、このような必避思想を流行させた…とは考えられないだろうか?僕らの時代で云うならば、学生運動が盛んだった項のグループサウンズ。そして今、公害という今までになかったたぐいのものか答地に現れれ、主義主張といったものをとうりこして、生命の維持、存続の危機に直面する斗いが日本中であこなれれている。そういった時に流行する今の逃避思想、利用されるやさしての世代。そして大正の逃避思

想もまた国家の口で広められたかけではなく、文壇の中の少数の人面の書く文章によって 広められたというわけなんだ。

そしてその後何が起こったのか。 関東大震災のドサクサにまぎれての多くの朝鮮人、あるいはアナキスト大杉党らの虐殺。 治安維持法による革命グループに対する弾圧。 やさしいしはいから恐しい弾圧へ。 そして起こるべくして起こった経済大恐慌。 その解決策としてあ満川侵略。 そして時難は願いもしない太平洋戦争へとつ、 ぱし、たじゃないか。

それじゃ 号、僕らの生きているこの今はどうだ。有事立法なんて31つをうなのが現れれ、充分に宣伝され、言論統制は可能との国会発言。帝国主義ファシズムの怪物が頭を起こし軍靴のかびきが近づいてくるように思えないか?反戦の思想はどこへ行った。俺は戦争に行くのはゴメンだ!

いったいこんな時代にせさしいかくめいのような思想ではきていくということは、無意識のうちに体制に協力し、戦争を呼びよせ、革命の状況をしりだける役めり以外向も出来ないんじゃないだろうか。森の広さに気をとられていると、山の大きさがめからなくなるし、何もせずに熟れた柿を"早く落ちないかな"なんて指をくめえて待っていた。て柿は喰えっこしないんだ。

【やさしいしはいって何だ?】

これまで意識の操作について長々と書いてみたんだけど、僕らの意識を操作、管理していくということは、彼ら権力者にとっては当然のまた大切な仕事なんだ。をして現在のをれは、おしつけによる操作でなした、僕らを泳がしておいて効妙な操作で管理していくんだ。そしてそれは、社会の矛盾や本当の敵というやっを、まったく僕らの視界から遠ざけてしまうんだ。

実際に彼らはなかなか姿を現めさないし、僕らもまた見つけだせないごいたんだと思う。もちろんこれは、僕らを丸めこむために姿を現めさないのごあって、丸めこまれんとしてその策謀を見抜いたものには、敵はいくらごもその姿を現めしてくるし、また見えてくるものと思う。

それじゃ何故姿を見せないのかというと、もう今までにかなりの例をあげて説明してきたけれど、これは僕らの反抗の芽を発芽させないためだろう。強権的なおしっけに対しての反発は必至だ。だからその反発を発生させないために僕らを泳がせているんじゃないだろうから彼らめ何故反発させたからないのか。それはその反発エネルギー、反抗的精神がいるいるの社会問題、例えば三里塚やここ技チス斗争、その他多くの子にと接触し誘発し、彼らの最も恐れる革命エネルギーに変化し高揚していくのを防ぐためじゃないだろうか。だからその恐れを最も根本で防ぐために、まず姿、本質を現れさないことと、血気あふれる僕ろの意識を操作し、エネルギーを吸収していくんだ。

かによる支配には反抗がっきまとうか、意識の操作による支配は被支配者自らが奴隷化

してしまい、時代の決定機すら他人まかせにしてしまうんだ。これこそこの泳かせておいて、自由の幻想を与えることによって、確実に僕らからたかなものを奪っていく支配のしかた、やさしいしはいめ本質なんだ。

この彼らの当然ではあるが陰険な仕事に対し、僕らはどんな態度で望んでいくのか。こんなつまらないことに熱中しているこの国、この時代とは何なのかということを、もっともっと深く堪りさげてみなくてはいけないんじゃないのかな。そしてやさしさの世代なんて不名誉な呼ば名は、のしをつけてつき帰をうじゃないか。

[何を為すべきか]

最初に書いたように無我利に来るのはこれでて度目になる。この2度の来診によって素晴しい自然を感じると共に、日本という国の矛盾も感じてしまった。中央の地方に対する差別と侵略、村のボス政治、金による人向の破壊、"石油企業は夢を育て暮らしを豊かにしますよ"と盲が人民を手引きしている。

としてそれらに対して斗う人民の情熱も、僕の心を激しくふるれせる。強烈なヴァイブ しーミュンと、それの持つやさしさ。やさしさとは怒りをともなってこそ本物のようだ。

これらの人々、これらの海や山に対する侵略に直面し、僕は自向せずにいられなかった。何を為すべきか。風景を記憶化してしまうとんでもない計画を、何が向でも稟現しようとする亡者共にどう対処していくべきか。日本中にばらまかれようとしているプルトニウム、それより恐しい亡者共の深き欲望。日本だけでは飽きたらず、東南アジアをはじめ世界の人民を苦しめる不耕賞賞野郎(耕さずしてむさぼり喰う者)今までに妻いてきたすべてのことは、僕自身に対する自向自答だった。もはや僕はのんびりしてはいられない。

敵たる亡者の姿が見えてきた今、亡者共を打ち倒すのに何か必要なのか、過去多くの人 民が死をもって教えてくれた歴史を、僕は想い起こすだろう。そして知識だけではなく、 直接行動への参加など、為すことによって学び、自らを実験台にすることにより、生き生 きと生きるための自分自身の革命を蜂起させるだろう。

それかも者共がやさしい顔をして使うを操作しようとする策謀に対し、カウンターパンチをくられせることだと信じて。





熱いてももって生きていたい

産まれてきた子供を見た時 私が産んだろではあるけれども この人は私とは別個の魂を持つ人なのだ。もし、性格的に合わなくてもこれからみ互いの共同生活が始まるのだから、私は私なりにやっていくしかないな、というムガリに対する気持ちがそのまま子供にも通じていました。母親になった感動なんていうのも、産んだ喜びなんていうのもなく、運命のめぐり合わせで私の体から生まれたこの人とも、これから共同生活が始まるんだ、と思うだけでした。

シッコレスは泣き腹が減っては泣き、眠たいといっては泣く、喰っちゃ寝、くっちゃねの 赤ン坊に、私は産んだ本人として従わざるを得ません。けれど、私だけがコキ便われてい る様で不公平に思われ、泣き声で起される度に親であるみんたも動生をとれ、というつも りで無理矢理ウルフを起した事もありました。しかし母乳をやっているのに無理矢理起し マオシメを替えさせるのは酷な事でした。でもしかし、泣き声にどりともせず、寝見をた てられては腹も立ちます。屋のみならず夜も変らず、眠たいところを起され、乳をやり 眠るまで付き合わされる毎日で私は大変なんだという事を知ってもらいたかったので す。産婦さんは寝るのがは事」と言ってけいているみんなの中でゴロゴロする事が難かし かったのです。その当時、おととしは、アブリ漁に出漁し始めて二年目。借金もあって、 経済が安定してるとはいえませんでした。午乳が卵は、妊産婦や子供のみに限り、最低の必 需品だけに金を使う、といった状態で喰いたいものもガマンする禁欲的生活は、始終腹の 減っている産婦のみならず、ムガリ全体としてもキツイ時期でした。その状態で部落のは、 あちゃんの家にいってはガツガツ飯を喰う私達でした。ヌ、そういう私達を受け入れ、 甘やかしてくれたのが、反対派で家の大家であるカメオバちゃんでした。カメオバに対 する安心感とは裏腹にあたムガリに対する気がねを私は解消出来す。しっくいいかない気分 転換をオバサンに求めていました。 オフクロ的オバサンの存在がるをムガリに関め させてくれたのです。 ヌ当時では、自分を産婦ということで保護されるべき所に身を置い ときながら、腰の悪いタエやチェニ対して思いやりを持てませんでした。病人に対して思い いやりを持つのはなかなかむづかしい事です。又病人の方でも誰かにしわよせが及んでい ると思うと精神的に安心出来が休めません。しかし、タエやチェはもっと要抗すべきだっ たと思うのです。無理してけかず、寝込みを決め込んで良かったのです。仲間に任し切れ は良かってこのです。ムガリに居座りを決成込んで、要求を出していたらなんとかなってい たはずです。

表は、こので育というもの子技の面倒も、メシもセンタクも放り出して原稿を書いてきました。書かゆばならないし集中する時面が必要だからしかよせが仲間に寄るな覚悟でひとりにさせてもらっていました。こみずうずらい要求を原稿を仕上げたら

オやタカオやエイキに押しつけて独りきりにさせてもらっていました。その成果は 原稿に ごはない 3洪と仲間との間に表われました。私のいないところで、3供は自立した一人と して私以外の人間との関係、信頼関係を結ぶことになったのです。そして驚いた事には、昨 日の晩、その場に私がいるというのに、一才半になるひかりはエイキと風呂に入ったので す。泣くどころかオーイとかポニコーとかカアチャーンとか大声を出して遊んでいまし た。これまでせいぜい万葉や宇摩と一緒でなかったら入らなかったのにムガリに来て二 月しかならない人と二人きりで「風呂に入るないて驚きに値します。いっもベタベタされる 私としてはバンバンザイ、これだから大勢一緒に住むのって好きなんです。型にはまる事 なく自分が生きていく自由を模索出来る自由が共同体にあると思います。子供に余計 な出しゃばりか手出しは必要ありません。はしゃいで調子に乗り過ぎている時は危険 だけれど、黙って見ていると意外に慎重なものです。 そしてる供はちゃんと自分の要 求をもって生きています。子供の要求にも徒うし、こちらの要求にも徒ってもらう。子供 も大人もよっない様で生きていてうまくいっていると思います。

要求を出して生きる事を子供から数わりました。喰いたかったら喰えば良い、寝たかっ たら寝れば良い、又寝たくなかったらその要求もしまっきり出せなければならない。人間い合い の中でイヤイヤ続ける事は人を鈍化させます。女は、妻や主婦や母である以前に生き 住きと生きるべき人向です。 私は産後の疲れ以来 ウルフとのセックスに退風していました。 このままズルズルベッタラでは良くないと思い付き合いのセックスを断かりました。

でいたくない時にはやいたくない。サワルナスケベ!」当然ウルフの欲求不満と がっかりました。初めて頭に来て涼もこぼれました。

知は自分の欲求通りに生きていたいんだ。付き合うのはもうゴメンだ。どうして イヤダというのを聞き入れないんだ。反対運動を無視して計画をゴリ押しある政府 と一緒じゃゆえか、カで倒して成り立ってきたこの社会ってのはおんたが今やろうとして いる男の、強者の論理ってもんだ。あんたが変革しない限り何の運動をやっても 無駄だね」。 男とはボッキするオチンチンをかかえた哀れな種ってものです。アホイン! 彼は悩みここを出る事も考えました。しかし枝チス両争がある限り出ていく事は、 不可能です。二人共、ムガリでかっていく事に小野を感じているみだから問題は自分で 乗り越なければならないのです。前進しか取りません。・・・ヌ、言ってきました。 やっぱり マスターベーションだけじゃ 満足出来ない」

ナニ! 女と寝て女の体に触って穴に突っ込む事を前提にしているからじゃないか、

女の体をあてにするなり

男は寝たくなったら女の承諾を得るaが道理。

女は男に付き合うのではなく自分の飲むに従って行動しかなものはイヤと いかなくちゃいけません。

生殖機能の良いとこだけからしてもらっているのであから男が世か生にわがままを言う等

もっての他です。女が新闻を読み 男が台前の後片付けをするのが 日常にならなけかば ウソです。

私達は、そうなまやさしく変革される生身ではありません。

理論より何かり自分の放抗通りに生きていたいのです。だから気が付いた時点から斗うしかありません。る供の自分に戻った様な東縛の系から解かれる様な解放はこういった汁して得られるものなのです。

授精し下印細胞が細胞分裂を起こしている時にどこか外から魂が、胎内に入って知生命体に宿るという話しを聞いた事があります。魂は女や男の体をもって世の様々な境圏の下に生まれて来ているのですから一人一人尊がべる存在です。 なのに差別や支配や収奪で苦しめられている現状です。又それと輪廻の魂として永遠の禁いである地球に手をかけ、ちれを切り売りし、破壊する行為も、悪の行為に他なりません

私達が、この世に生れてきた目的は何かといえば、悪の行為に加担するためではなく、悪とたたかうために生れてきたのです。女も男も、共にこのたたかいに臨むべきです。知識がないと自然と、企業側・悪にからめとられていく世の中で、人類の半数以上占める女が、無知に置かれる事は恐ろしい事です。女が家事、育児にとらかれ続けている間になんどん流されてしまいます。自分を見失っている間に、悪にひきずり込まれてしまいます。自分が求めるものは何なのか常に自らに問い続けて要求を出し続けなければ、良くならないと思います。

フレーッ! フレーッ! オンナフレーッ! オトコ



※「女·エロス」編集委員会 頼都新宿区坂町22萩野荘にお向い合かせ下さい。

盗作随想1 「美里離れのこと」新え博文

ひとつ.

奥里はりこムン(かパームの兄貴)も多いところであった。長浜で畑作をしていた 久志部落の人が、ある日畑の上を覆っているがジュマルの樹を切ろうと決心した。その樹にはりこムンがいると伝えられて来たので今迄一枝も切ららかったのであるが、さすがにたまりかねたのである。そこで彼は『大変申し訳はいが、この枝が邪魔で作物が臭らない。どうかこの一枝だけ切らせて下さい』と言って切ろうとしたところ、樹の中から声がして『長い間、宿を貸して下さってありがとうございました。私はこれから徳え島へお嫁に行くのでもう必要ありませんから遠慮はく切って下さい』と言ったという。

よっつ.

部落の誰にも内緒で食里へ通って、椎の 更き拾い集めていた男があった。三日目、その日 食里には誰一人 おらず、地面を真黒にするほどの椎の臭が落ちていた。たっぷり背負って 、ドン:の山中にある大きほ岩の下を通りかかった時、突然岩の上から¹⁷サラム、イイカ ゲンスリー (おまえもいい加減にせい!)という声があったので見上げると、杖を持った白髪の老人が岩の上に立っていたという。

図室のK氏は、これも戦後間もほい頃であるが、カモ聖ちに奥里へ出かけたある夕市のこと、山の中腹にある田袋で、ススキに隠れて待っていたところ、数メートに前を子供くらいの背恰好の黒い人影が通りかかった。さてはケンムンにちがいないと、いたずら半市に小石を投げたところ、パッと消えてしまった。やっぱりケンムこにちがいなかったという確信を深め、連れと二人で夜中まで待ったが、ついたカモは一部も田袋に来なかった。毎夜来ている足跡があるのに、この夜だけ来ほかったのは、小石で鶯ろかされたケンムンが、腹いせたカモを追い散らしたに相違ないと、確信をまずまず深めたという。むっつ・

話はとび限びであるが、これも間室の人が最初に話したシービし浜の泊り小屋に、十日ばかり住みこんで農作業をしていた時のこと。ある寒い夜、炉に薪を焚いて一人で脱酌をしていたところ、ついけりりと睡騰に囚われ、横になっていた。いつしか新も燃え尽きたのか、冷気がして目を醒し、フト見ると、5~6才の子供の風体をした者が2~3人、炉に手をかざしていた。細目を開けて様子を伺っているうちに、いつしか消えてしまったという。

